Shueisha
Series
Common

「世界の終わり」の地政学

野蛮化する経済の悲劇を読む

ピーター・ゼイハン
山田美明 訳

上

集英社シリーズ・コモン

誰に献辞を書けばいいのかわからない。私はそれほど幸運だった。

私はちょうどいい時代にちょうどいい国に生まれ、無事に育った。

核爆弾から身を守る方法を教えられた時代から5Gの時代へと至る変化のなかで、
断絶と好機を認識できるほど、年を重ねていると同時に若かった。

数えきれないほどの恩師にも恵まれた。
彼らが自分の役割を果たす選択をしなければ、そんな恩恵には与(あずか)れなかっただろう。

この分野で仕事ができるのは、これまでに現れた人々のおかげであり、
未来を読むことができるのは、これから現れる人々に尋ねられる質問があるからにほかならない。

あの生まれ故郷の町がなければ、私の仕事も私の人生もなかった。

だから、ありがとう。

すべてに感謝している。

The End of the World Is Just the Beginning

Mapping the Collapse of Globalization

By Peter Zeihan

Copyright @2022 by Peter Zeihan
All rights reserved.
Japanese translation rights arranged with HODGMAN LITERARY
through Japan UNI Agency, Inc.

こうして世界は終わる。
激しい衝撃音ではなく、めそめそした泣き声とともに。
――T・S・エリオット

そううまくはいかない。
――ドイツのことわざ

「世界の終わり」の地政学　目次

「世界の終わり」の地政学　上　目次

はじめに……12

第一部　一つの時代の終わり……23

第一章　始まりは、いかにして始まったのか？……24
第二章　偶然の超大国アメリカ……46
第三章　流れをがらりと変えたもの……62
第四章　人口の物語……70
第五章　歴史のスピードアップ……78
第六章　恐るべき「脱文明化」とは？……98
第七章　「より多く」の終わり……106
第八章　頼りにならない先行例……124
第九章　「より多く」の最後のかけら……136

第二部　輸送……159

第一章　長い道のり……160
第二章　制約からの解放——輸送を工業化する……172
第三章　アメリカナイズされた交易……182
第四章　大いなる揺り戻し……200
第五章　嵐のなかの波止場……218

第三部　金融……237

第一章　通貨——道なき道を行く……238
第二章　資本を使って冒険する……260
第三章　惨事は相対的なもの……284
第四章　続・「より多く」の終わり——人口と資本……290
第五章　融資概況……298
第六章　金融が破綻する未来とは……308

「世界の終わり」の地政学　下　目次

第四部　エネルギー　11

第一章　銛で手に入れた進歩
第二章　「秩序」が必要とした石油
第三章　石油地図・現代版
第四章　石油の話は石油に終わらず
第五章　未来を動かす燃料

第五部　工業用原材料　91

第一章　歴史を分解してみる
第二章　必要不可欠な原材料
第三章　未来の原材料
第四章　永遠の素材
第五章　ヤバい素材
第六章　懸念の少ない素材
第七章　これが世界の終わりかた

第六部　製造業　147

第一章　今の世界はいかにつくられたのか
第二章　現在の地図
第三章　未来の地図
第四章　新たな世界を製造する

第七部　農業　233

第一章　危機に瀕しているもの
第二章　脆弱性の地政学
第三章　最悪の事態を避けるか、受け入れるか
第四章　飢餓を緩和する
第五章　拡大する食、縮小する食

第六章　農業と気候変動
第七章　新しい世界の食料供給
第八章　黙示録の第三の騎士――飢饉の長期支配
おわりに　336
謝辞　344

凡例

・原著の註は各見開き、もしくは次の見開きに付した
・訳者による補足の註は［　］で示した
・すべての図表の著作権は、左記のとおり

©2022　Zeihan Geopolitics

はじめに

過去一世紀ほどの間に、電撃的と言ってもよい進歩があった。馬車から列車、自家用車、日常的な飛行機旅行へ。そろばんから加算器、電卓、スマートフォンへ。鉄からステンレス鋼、シリコン入りアルミニウム、タッチセンサー用ガラスへ。小麦が育つのを待つだけの農業から、柑橘類を大規模に栽培する農業へ。チョコレートが特産品として献上された時代から、グワカモーレ［訳注：アボカドのディップ］がオンデマンドで届く時代へ。

私たちの世界は、どんどん安価になっている。また、確実によくなった。さらに、間違いなく速くなった。ここ数十年で、変化や成果を生み出すペースはさらに加速している。わずか一五年のうちに、洗練の度を高めていくｉＰｈｏｎｅが、三〇種以上発売されるのを私たちは目撃してきた。自動車業界は、かつて内燃機関が採用されたときよりも一〇倍も速いペースで、電気自動車の販売へと移行しようとしている。いま私が叩いているノートパソコンのメモリは、一九六〇年代後半にこの世界に存在していた、すべてのコンピューターメモリの総計よりも多

い。つい最近までは、二・五％の金利で住宅ローンの借り換えができた（バカみたいにすごい数字だ）。

モノやスピードやお金だけではない。人間の生活状態も同様に向上した。過去七五年間に戦争や占領、飢饉や病気の発生する頻度がどんどん減っていき、そうした災禍で死ぬ人々が、人口比で有史以来最も少なくなった。歴史的観点から言えば、私たちはいま、あり余るほどの富と平和のなかで暮らしている。これらの進歩は、すべて緊密に結びついている。切り離すことはできない。だがそこには、普段見過ごされている単純な事実がある。

こうした富や進歩は、人為的なものだ。私たちは完璧な時代を生きてきた。

そして、そんな時代は過ぎ去ろうとしている。

過去数十年間の世界は、私たちが生きている間に経験できるであろう最高の世界だった。だがこれからは、安価で質がよく迅速な世界から、高価で質が悪くのろい世界へと急速に移行していく。なぜなら、この私たちの世界がばらばらになって崩壊しつつあるからだ。

少々説明を先走りすぎたようだ。

本書はさまざまな意味で、これまでの私の仕事のなかで最も「私」らしい内容だと言える。私は、地政学と人口統計学の交差点にあたるところで仕事をしている。地政学とは場所の学問であり、私たちのいる場所が、私たちを取り巻くあらゆるものをいかにして生み出してきたのかを探求する。人口統計学は、人口構造の学問である。一〇代の行動、三〇代の行動、五〇代の行動、七〇代の行動はそれぞれ違う。私はこの二つの学問のテーマを縫い合わせて未来を予

測する。これまでに出版した三冊の著書では、そのような形でさまざまな国家の興亡を描き、来るべき世界の「全体像」を探求してきた。

だが、ＣＩＡの本部で何度もそんな講演をするわけにもいかない。そのため私は、生活費を稼ぐためにほかの仕事もしている。

私の本業は、講演者とコンサルタントのハイブリッドのようなものだ（しゃれた業界用語では地政学ストラテジストと言うらしい）。

何らかのグループに招き入れられて仕事をする場合が多いが、そのグループが、アンゴラやウズベキスタンの未来に関心を寄せることなどめったにない。彼らが求めることや疑問に思うことは、自分の国の財布と関係しており、貿易や市場やアクセスに関する経済問題に集約される。私はそのなかで、こうしたグループが抱く問題（彼らの夢あるいは不安）に地政学と人口統計学をあてはめる。自分が導き出した「全体像」から関連する部分を抜き出し、それをそのグループの問題に適用する。アメリカ南東部の電力需要、ウィスコンシン州の精密機器製造、南アフリカの金融市場の流動性、メキシコ国境地域の治安と貿易の関係、アメリカ中西部の輸送手段、アメリカの政権交代時のエネルギー政策、韓国の重工業、ワシントン州の果樹といったような問題である。

本書の内容は、これらすべてを含むと同時に、それらをはるかに超えている。私はここでも、地政学と人口統計学という信頼できる持ち前のツールを使い、グローバル経済の構造の未来を予測する。いや、もっと正確に言えば、間もなく経済がグローバルなものでなくなっていく未

来を予測する。地平線の先にある世界の姿を示すために。

私たちが直面している問題の核心とは、地政学的にも人口統計学的にも、過去七五年のほとんどの期間、私たちが完璧な時代に生きていたという事実である。

第二次世界大戦末期、アメリカはソ連を抑え、封じ込め、撃退するために史上最大の軍事同盟をつくりあげた。それはすでに誰もが知っていることであり、驚くべきことではない。だが、そこで忘れられがちなのは、この軍事同盟がアメリカの計画の半分でしかなかったということだ。アメリカは新しい同盟を強化するため、グローバルな安全保障の環境も整備した。同盟国であれば、いつでもどこへでも自由に出かけ、誰とでも経済的に協力し、いかなるサプライチェーンに参加することも、いかなる原材料を入手することもできるようになった。軍隊の護衛がなくてもだ。このような「銃とバター」［軍事と経済］の取引のうち経済のほうが、現在「自由貿易」と呼ばれるものをつくりあげた。それがグローバル化である。

グローバル化は、史上初めて世界の幅広い地域に開発と工業化をもたらし、誰もがよく知っている大量消費社会やおびただしい頻度の貿易、猛烈な技術的進歩を生み出した。そしてそれが、世界の人口構成を変えた。大規模な開発と工業化は、人々の寿命を延ばすと同時に、都市化を促した。数十年にわたって労働者や消費者が増加の一途をたどり、経済に多大な刺激を与えた。その所産の一つが、人類がかつて経験したことがないほど急速な経済成長である。それが数十年も続いたのだ。

つまり、アメリカ主導の戦後「秩序」が、状況の変化を引き起こした。ゲームのルールを変

えることで、あらゆる場所で経済状態が変化した。地球レベルでも、国家レベルでも、地域レベルでも。その変化が、私たちが知っている現在の世界を生み出した。輸送や金融が進化・発展した世界、食料やエネルギーが絶えず供給される世界、進歩が止まらない世界、刺激的なスピードに満ちた世界である。

しかし、すべてのものは過ぎ去る運命にある。私たちはいま、新たな状況の変化に直面している。

冷戦の終結から三〇年がたち、アメリカは世界から撤退しつつある。だがアメリカ以外に、グローバルな安全保障やそれに基づくグローバルな貿易を維持できるほどの軍事力を持っている国はない。アメリカ主導の「秩序」が「無秩序」に道を譲ろうとしているのだ。また、成長を謳歌する完璧な時代にたどり着いたとたん、世界的な高齢化が始まった。この高齢化は、それ以来ずっと続いており、いまも止まっていない。世界の労働者や消費者が全体的に高齢化し、定年退職者が大幅に増加しつつある。都市化を急ぐあまり、上の世代の人口を置換できるほどには次の世代が生まれなかったのだ。

一九四五年以来、この世界は史上最高の状態にあった。だがこれからは、それ以上よくなることはないだろう。この時代を詩的に表現すれば、いまの世界の命運は尽きている。二〇二〇年代には、消費と生産と投資と貿易の崩壊が、あらゆる場所で見られるようになるだろう。グローバル化された世界は粉々に砕け散り、地域や国家、あるいはもっと小さな単位でばらばらになる。それには犠牲が伴う。生活はよりゆっくりになる。そして、より悪くなる。私たちが

直面するような未来でも機能できる経済システムは、いまだ構想さえされていない。

この退化は、控えめに言っても、かなりの衝撃を及ぼすことになるだろう。このいまの世界をつくりあげるのにも、数十年間に及ぶ平和が必要だった。これほど巨大な破綻に対して容易に、あるいは迅速に適応できると考えるのは、あまりに楽観的であり、少なくとも私はそんな楽観主義を持ち合わせてはいない。

とはいえ、道しるべがまったくないわけではない。

第一に、私が「成功をもたらす地理」と呼んでいるものがある。場所は重要な意味を持つ。その重要性をあなどってはいけない。エジプトの都市がいまある場所にあるのは、工業化以前の時代にそこに、水と砂漠という緩衝地帯の完璧な組み合わせがあったからだ。それとだいたい同じように、スペインやポルトガルが覇権を掌握できたのは、遠洋航海術を早々に習得したからだけでなく、半島という場所に位置していたために、ヨーロッパ大陸の全体的混乱の影響を受けにくかったからでもある。

そこに工業技術が加わると、事情は変わってくる。石炭やコンクリート、鉄道、鉄筋を大量に利用するには、多額の資金がかかる。そのための資金を自力で調達できる場所は、航行可能な水路が多い場所しかない。そのような場所でこそ、資本が生まれるからだ。ドイツは、ヨーロッパのどの国よりも多くの水路を有しており、それにより隆盛が約束されていた。だが、アメリカは、世界のどの国よりも多くの水路を有しており、必然的にドイツの凋落は避けられない。

第二に、すでにお気づきかもしれないが、「成功をもたらす地理」は不変ではない。技術が進歩するにつれ、勝者や敗者の内訳リストも変わる。水力や風力を利用する技術の発展によって、エジプトの優位性は過去のものとなり、新たな大国が登場する余地が生まれた。産業革命により、スペインが後景に退く一方で、大英帝国が進撃の始まりを告げた。それと同じように、やがて来る「無秩序」な世界と人口構成の崩壊は、無数の国々を過去へと葬り、ほかの国を台頭させることになるだろう。

第三に、起こりうる影響を決める条件が変わる……ほとんどすべての条件である。いまのこの世界はグローバル化されている。グローバル化された世界には一つの経済地理学しかない。全体を包摂する地理学である。その地理学では、取引や製品の種類を問わず、ほとんどのプロセスが少なくとも一回は国境線を越える。複雑なプロセスになれば、数千回も国境線を越える。だが、私たちがいま向かいつつある世界では、それはまったく賢明な方法ではない。脱グローバル化した世界においては、グローバル時代とは異なる経済地理が一つ存在するというだけではない。独立した経済地理が何千と存在するようになる。経済学的観点から言えば、全体が部分をすべて包摂すれば力が増す。そのなかで私たちは、富や進歩、スピードを獲得してきた。しかしこれからは、部分が分離し、それぞれの部分は弱体化していく。

第四に、世界的な混乱と劣化にもかかわらず、というよりもむしろ多くの場合はかえってそのために、アメリカはこの来るべき大混乱をおおむね回避できるだろう。そう言うと、読者は心のなかのウソ発見機を作動させ、不信感を抱くかもしれない。アメリカがこの騒然たる出来事を難なく乗り越えていけるなどと、どうして言えるのか？　ますます広がる経済的格差、日増しにほころびを露呈する社会構造、次第に自滅的になりつつある厳しい政治情勢をどう考えているのか？

読者が反射的にそんな疑念を抱くのもよくわかる。私は、核爆弾から身を守る方法を小学校で教えてもらうような時代に生まれ育った。だから、多様な視点を欠いた大学が提唱する「差別のない空間」、トランスジェンダーのトイレ使用に関する方針、ワクチンの効果といった問題が慣用句になるほど一般に浸透している一方で、核の拡散や世界におけるアメリカの地位といった問題が議論からほぼ閉め出されている状況に、憤りを覚えずにはいられない。ときにはこう思えることだってある。バーニー・サンダース［急進左派の政治家］とマージョリー・テイラー・グリーン［トランプ支持の極右政治家］がこの四年の間に密会を重ねて生み出してきた、でたらめな思想の継ぎ合わせが、いまのアメリカの政策なのではないか、と。

それを私がどう考えるかって？　私の答えはシンプルだ。私の答えは、これまでもいまも彼ら政治家とは無関係だ。この「彼ら」とは、現代アメリカの急進的な左派や右派を自認する自由奔放な変人たちだけではなく、アメリカの政界関係者全員を指している。アメリカは、二〇二〇年代になるまで政治システムの全面的な再編を経験してこなかったわけではない。歴史的視点を持つ人々から見れば、これは第七ラウンドにあたる。アメリカがこれまでも試練を生き延びて繁栄してきたのは、地理的に見て大半の世界から隔絶されており、人口統計学的に見て大半の世界より人口構成が際立って若かったからだ。アメリカは現在も将来も同様の理由で生

き延び、繁栄していくことだろう。アメリカの強みから見れば、現在の論争などつまらないものに見える。こうした論争が、アメリカの強みに影響を及ぼすことはまずない。

間もなく現実になる世界のなかで、奇妙なことにアメリカ人は、ささいな内輪の口論に夢中になるあまり、気づかないかもしれない。ほかの場所では、この世界が終わろうとしていることに！　光は揺らめき、次第に暗くなる。飢饉のしなやかな爪に捕らわれ、逃げられなくなる。現代世界を特徴づけていた資源（資金や原材料、労働力）を十分に手に入れられず、近代的な生活が維持できなくなる。もちろん場所によって展開は異なるだろうが、全体的な傾向に変わりはない。過去七五年は、黄金時代として、そのまま長くは続かなかった時代として記憶されることになる。

本書の中心となるのは、私たちの世界を私たちの世界たらしめてきた、あらゆる経済部門のあらゆる側面で今後起ころうとしている変化の大きさや広がりを明らかにすることだけではない。いかに歴史が再び前へ進もうとしているか、いかにこの世界が終焉（しゅうえん）を迎えるのかを明らかにすることだけでもない。本書の真のテーマは、この状況の変化をその先から眺めたときに、あらゆるものがどのように見えるのかを描き出すことにある。今後の世界を左右する新たな条件とは何なのか？　脱グローバル化した世界における新たな「成功をもたらす地理」とは、どんなものなのか？

次に何が起きるのか？

結局のところ、この世界の終わりは、実際には始まりに過ぎない。それなら、そこから説明を始めるのがいちばんいい。

この世界の始まりから。